

## 自分とは異質な他者の考えに触れる家庭科の授業が、 多様な生き方・働き方への扉を開く

桐朋高校（東京・私立）

### 男子校の家庭科の授業で 女子校とのディスカッション

家庭科は従前から、保育や福祉、生活設計などキャリアプランに関わる単元が含まれる教科だ。男子校である桐朋高校では2年生が履修し、生徒たちの視野を広げ、将来の自分の家族、暮らし、仕事、生活と社会のあり方などをつなげ、生活のリアリティを感じ取りながら「生きる」ことを考えるカリキュラムを組んでいる。その一つが、系列校の桐朋女子高校との意見交流会だ。

この取組が始まったのは20年前の2001年度。桐朋高校と桐朋女子高校の当時の家庭科教員同士の交流の中から、両校の生徒に人生観についてのアンケート調査を行うことになった。例えば、「仕事を選ぶうとするときに重視すること」「結婚相手を決めるときに自分にとって大切な条件」「日常生活のなかで性別の違いにかかわることで不公平と感じること」「結婚後の夫婦の働き方」「共働きでの家事分担」など、職業観、結婚観、男女の性差についてのジェンダー観、結婚後のライフ

スタイルについての展望などを尋ねるものだ。

開始当初は女性の社会進出が進み、女子生徒たちが社会人としてのキャリアを積みながら家庭ももつ人生を構築したいと考えている一方で、男子校の生徒にはその考えに対する理解がまだ得られにくい時代だった。男女で意見の違いがあるなら、実際に面と向かってお互いの疑問を意見交換してはどうかと始まったのが、両校での交流会だ。

男女の違いだけでなく、社会に出れば自分とは異なる多様な意見や見方に遭遇することになる。そのときに、例えばパートナーと意見が合わないと思いがちこともあるだろう。女子生徒たちは、同校の生徒たちが将来共に働いたり、パートナーとして生きていく可能性がある同世代人だ。彼女たちの社会参画や家庭に対する意識や本音を高校生のうち知り意見交換することが、将来に想像される困難へのシミュレーションになると考えているのだ。

議論が白熱したときに  
データが自分のものになっていく

カリキュラムの流れは、2年生の1学期にライフイベントを体系的に学び、生活設計、いわば「未来の年表」を作成する授業を受けた後、両校でそれぞれアンケートを実施。集計したアンケートデータに基づき、相手校に質問してみたいことについてクラスごとに議論し、3テーマほどに絞りこむ。そのうえで、11月の初旬に各校から20名ずつ、計40名の生徒が集まって交流会を実施。各校から4名ずつの8名1グループでディスカッションを行う。

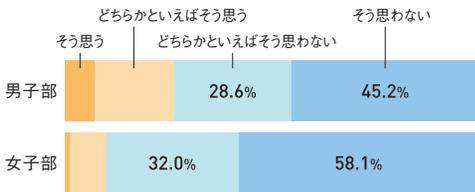
「校内での議論でも交流会でも、結婚観の集計結果について生徒たちは大いに盛り上がります」（中山めぐみ先生）

例えば、結婚後のライフスタイルについて同校の生徒の回答は、「生涯共働き」が昔より増えているものの、男女ともに「（妻が）子どもが生まれたら専業主婦となるが、子育てが一段落したら復職する」が現在でも最多回答だ（図1）。

「事前授業で女性の就業率がM字カーブする日本の特徴や、一度退職すると復職が大変な話はしていますが、生徒たちには就職や結婚後のイメージや、どうキャリアアップしていくかという視点をもつことはまだ難しいようです」（中山先生）

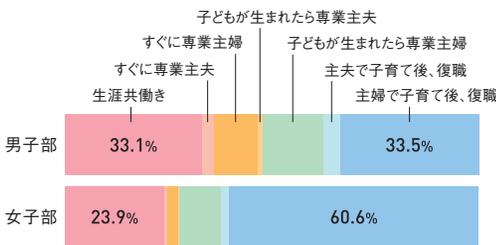
図1 桐朋高校と桐朋女子高校のアンケート比較（昨年度・一部抜粋）

#### ●夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである



夫は仕事、妻は家庭という考えは男女とも大半が「そう思わない」と回答しているが、女子の方が否定がより多い。

#### ●結婚後のライフスタイル



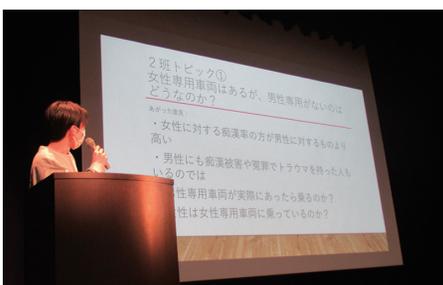
結婚後のライフスタイルは、男女とも「（妻が）主婦で子育て後に復職」が最多で女子の方がその傾向が高かった。



家庭科  
中山めぐみ先生



昨年度の交流会。「初対面での意見交換でも、お互いの意見を受け入れる柔軟さは大人以上にあり、感心します」(中山先生)



昨年度から始まった、交流会後の報告会。なかにはアンケート項目以外の話題で議論されたことを報告する生徒も。

### 生徒たちの声

●バリバリ仕事をしてキャリアを築きたい人もいれば、家庭を大切にしたい人もいて、考え方は人それぞれなので、お互い話し合って向き合うことが大切ではないかと思いました。

●「女性は男性におごってほしいとは思っていない」と聞いて、本当にそう思っているのかと疑問に思い、実際に会って話してみないとわからないこともあると感じた。今後生きていくうえで、相手の考えをしっかりと聞くべきだと思った。数年後には社会人になり、社会を支えていくうえで、夫婦別姓問題など、すべての人がより良く生活できるように取り組んでいきたい。

●女性が男性に求める条件はさまざまであることがわかった。今後はさまざまな場面で女性と協力しなければならないことが増えるので、お互いに尊重し合える関係がつかれるようにしたい。また、結婚できたらパートナーとの協力はより大事になると思うので、協力して楽しい家庭を築きたい。

#### <桐朋女子高校の交流会参加者感想>

●私は参加者を無意識に男女で区別して認識していたことに気づくことができました。自分の先入観に気づくことができたのは大きな利益になりました。

●お互いが思うことについて、なぜそう思うのかの経緯を探っていくことで誤解が解け、新しい発見がありました。

また交流会では、実際に対面し、ディスカッションを通してわかること、気づくことがあると学んでいく。例えば過去には、女子が結婚相手に求める条件の上位である「収入のよさ」について、男子生徒は「女子は収入が高い相手に養われたい」と理解していた。しかし、女子生徒たちから、自分に収入がある前提で「お互いが近い収入⇨収入がよい」で、収入が近ければ価値観も近くなるという思いを説明され、男子生徒たちは驚いていた。

また交流会では、実際に対面し、ディスカッションを通してわかること、気づくことがあると学んでいく。例えば過去には、女子が結婚相手に求める条件の上位である「収入のよさ」について、男子生徒は「女子は収入が高い相手に養われたい」と理解していた。しかし、女子生徒たちから、自分に収入がある前提で「お互いが近い収入⇨収入がよい」で、収入が近ければ価値観も近くなるという思いを説明され、男子生徒たちは驚いていた。

### 未知の人生観、家族観に触れ 多様な生き方を発見する

見出ししていることが見てとれた。報告会後に生徒全員が書いた感想の一部が左の「生徒たちの声」だ。交流会によって生徒たち自身の意見に必ずしも変化が起きているわけではない。「女子生徒の意見に驚いたり、新たな発見があることに意味がある」と思っています。近年は、ニュートラルな意見をもつ生徒が多く、性差よりも個人によって意見が多様化しているように感じます。ただそれが本音なのか、時代の流れに付度した考えなのかはわかりません(中山先生)

家庭科での体験が、人生の岐路で勇気を出せる一助に  
今後は過去のアンケート回答の分析をしてみたいと考えている。その変遷を生徒と共に俯瞰してみることで、現在を生きる生徒たちが、自分を取り巻く環境に対して気づきを得るのではないかと期待しているからだ。  
「家庭科における学びはすぐに、またダイレクトに生徒の力になることばかりではありません。しかし、生徒たちは高校を卒業した後に、さまざまな岐路に立ち困難に向き合っていくか悩まなりません。他者と向き合い、意見を交わし、生き方について考えた体験が、人生のがんばりどころで勇気を出せる一助になることを願っています」(中山先生)